

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 13 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2014～2016

課題番号：26301043

研究課題名(和文) 掛け合い歌のメカニズムを応用した音楽学習過程の研究 アジアの民俗音楽調査をもとに

研究課題名(英文) Application of the Mechanism of Musical Dialogue to Music Learning Process: Based on an investigation into Asian folk music

研究代表者

伊野 義博 (Ino, Yoshihiro)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：60242393

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、即興的に掛け合う歌唱行動が歴史的にも地理的にも受け継がれているアジア地域の「掛け合い歌」について、ブータンを中心に民俗音楽的な調査を行い、その成果を音楽教育学へと応用し、日本の学校教育の新しい方向性を見出した。民俗音楽調査では、ブータンの掛け合い歌の全体像を明らかにし、同時にラオス、チベット族、横手市の掛け合い歌の構造や継承の実際を浮かび上がらせた。これらは多様な様相を示しながらも、一定の旋律の枠組み、歌詞の記憶、修辞法、即興性、歌の場の存在等において、共通のメカニズムを持っていた。このメカニズムをもとに、日本の学校教育における掛け合い歌の実践をし、方法論として提案を行った。

研究成果の概要(英文)：Musical dialogue is a form of improvisational dialogue in Asian folk music, which have been influenced by the local history, place and traditions. This research investigates into how the musical dialogue in traditional Bhutanese folk music can be applied to discover new possibilities of using “dialogue” and “improvisation” in music education in Japanese schools.

研究分野：音楽教育学

キーワード：掛け合い歌 音楽教育 学習過程 民俗音楽 ツァンモ Tsangmo

### 1. 研究開始当初の背景

近代日本の学校における音楽教育は、西洋芸術音楽を中心にその思想や音楽観、学習のメカニズムをもとに実践された。これに対して、音楽学者の小島美子は、日本人が「直接的に自分たちの感じることをそのまま表現し、もっと素直に楽しみ身近なものだということ、決定的に忘れさせてしまった」と批判的である(小島美子『歌をなくした日本人』音楽之友社、1981)。

日本の子どもは、もともと、わらべうたのように自分の好きな歌を歌い、あるいはつくり替え、相手に伝えることを自然に行ってきた。このような歌の有り様は、古くは古事記や日本書紀などで見られており、日本人に引き継がれてきた自然な歌唱行動である。

こうした行為の中核になってきたのが「掛け合い歌」である。こうした文化は、日本を含むアジア地域において歴史的に長く、地理的に広く受け継がれているが、その社会的文化的コンテクストを踏まえたメカニズムについて、これまで学習論の視点で考察されたことはなかった。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、即興的に掛け合う歌唱行動が歴史的にも地理的にも受け継がれているアジア地域の「掛け合い歌」について、ブータンを中心に民俗音楽的な調査を行い、その成果を音楽教育学へと応用し、日本の学校緒教育の新しい方向性を見出すことにある。具体的な目的は、以下の3点である。

- (1) 「掛け合い歌」のメカニズムを明らかにすること。
- (2) その結果を学校教育に照射し、音楽の学習過程を捉え直すこと。
- (3) 音楽教育の新たな方法論として提案すること。

### 3. 研究の方法

以下の方法により目的を達成する。

- (1) 「掛け合い歌」に関する基本的な文献調査と整理
- (2) ブータンをはじめ、ラオス、内モンゴル、秋田県横手市等での「掛け合い歌」の実施調査と分析
- (3) ブータンの学校教育における伝統的な「掛け合い歌」の状況調査
- (4) 「掛け合い歌」のメカニズムについての分析と学習への応用の検討
- (5) ブータンでの学校教育における「掛け合い歌」大会及びシンポジウムの実施、歌の意義と可能性についての検討
- (6) 日本の学校教育における「掛け合い歌」を用いた授業の実践と検証及び提案

### 4. 研究成果

- (1) 平成26年度は、継続してきたブータンの「掛け合い歌」の調査を補完し、その全体像を描くとともに、日本の「掛け合い歌」

の調査を行い、その多様性を見える形で示した。例えば、東ブータンのタシガンサクテン郡メラ村では、類似したしかし異なる「掛け合い歌」がみられた。一連の調査から以下のことが確認できた。二組に分かれて歌を掛け合う歌唱形態がみられたこと。

広範囲で歌われる共通の旋律の存在が確認される一方で、地域限定の旋律が予想されたこと。基本的には6音節4行という詩文の韻律的な構造がみられたこと。「掛け合い歌」は生活形態の急激な変化から歌唱機会が減り、現在伝承されず消えつつある状況にあること。[雑誌論文 など]

また、音楽教育における「掛け合い歌から得られる力」として以下の整理を行うとともに、音楽教育並びに学校教育の取り組みに対する提案を行った。[雑誌論文 など]

- 「歌(歌詞)をつくること」から
- ・ 一定の韻律に合わせて歌詞をつくる力
  - ・ 音楽に合わせて歌詞を歌う力
- 「歌を掛け合うこと」から
- ・ 歌でコミュニケーションをはかる力
  - ・ 相手の歌い方をふまえて自分の歌を歌う力
- 「歌詞をつくることと音楽のかかわり」から
- ・ 歌詞をつくって音楽に合わせて歌えるよう、音楽を身体に覚え込む力
  - ・ 歌詞の音節数や内容に合わせて、即興で音楽のヴァリエーションをつくっていく力

(2) 平成27年度は、ブータンにおける「掛け合い歌」ツァンモ等の継承の現在を探った。学校教育における伝統文化としてのツァンモの位置づけや指導の実際、教員へのインタビューなどを通して、伝統文化としてのツァンモの継承の課題や意義について実態調査を行った。また、メディアの活動の実際、放送内容や活動方針等について、実態調査を行った。さらに、秋田県横手市、ラオス、チベットの「掛け合い歌」の調査も継続した。

ブータンでは、地域で伝承されなくなった「掛け合い歌」が、かたちを変えて学校やラジオで伝承されつつある。ブータンでは音楽のカリキュラムはないが、ゾンカ(国語)の授業、課外活動、学校が催す歌の大会により伝承が行われていた。[雑誌論文 など]

学校教育におけるツァンモの継承の具体的な取り組みを、中等学校2校に取材した。そこでは、生徒が、自分の出身地のツァンモを直接取材し、それをもとに、学校では大規模な大会を開催していた。学生がブータンの文化を直接調査し、それを新たな学校文化として再創造している取り組みはきわめて貴重である。学校が伝統的な歌の有り様を教育活動に取り入れる意義や方法論

について、次のような整理ができた。学校の文化活動が重視され、土曜日の文化活動など年間を通じた組織的計画的な活動があり、日本の学校との相違点となっている。

歌の「大会」という形で、歌の伝統的な性格が継承されている。学校の意図的な教育の営みとして、歌の由来、種類、価値、遊びの方法、詩文の学習や解釈法、旋律や歌の類別といったことが整理されて伝えられている。相手の歌の内容を理解し即座に適切な詩を用いて歌い返す力、即興的に言葉をつくり歌で伝える力、歌でコミュニケーションする力等が養われている。

また、音楽教育の点からは、メカニズムの視点から「掛け合い歌」を捉え、民俗音楽と学校教育の接点を探るとともに、

学校教育における実践を試み、事例を紹介し、子供の反応、場の生成、実践上の工夫、成果、検討について検討した。については、中国内モンゴル族の「掛け合い歌」と青海省チベット族の「掛け合い歌」について、また、ラオスにおける学校教育の実際について報告し、これらをメカニズムの点から捉えた。については、ブータンの学校教育の現状から報告した。については、学校教育の実践事例を紹介し、実践への展開について、基本的な枠組みを提案した。[雑誌論文 など]

また、ブータンの「掛け合い歌」の実際をふりかえり、音楽科の歌唱における学習過程を再考した。そこでは、音楽科において人が生涯にわたり音楽文化とかかわっていく土台を築くためには、楽譜の理解や表現技能、「音楽に対する思いや意図」を重視する学習過程では不十分であること。楽譜を介さなくても、なじみのある詩形や既存の旋律を活用しながら「相手に伝えたい思いや気持ち」を自在に歌い出せる歌のメカニズムが重要であることを説いた。[雑誌論文]

(3) 平成 28 年度は、活動のまとめとして、大きく次の 2 点の成果をあげた。

第 1 に、ブータンにて、「掛け合い歌」ツァンモの大会とシンポジウムを開催した。大会では、伝統的な掛け合いや評価の方法を生かした大会を意識した。シンポジウムでは、伝統文化としてのツァンモの継承と発展及びそこから学ぶ日本の音楽教育について、ブータン及び日本の研究者による発表と意見交換を行った。[雑誌論文]

ツァンモの大会は、ブータンの首都ティンブプーにあるケルキ・ハイヤー・セカンダリー・ハイスクールにて、同校の生徒とティンレガン・セントラルスクールの生徒との対抗合戦の形で、教育大臣を招待し、550 人の生徒を前に実施された。生徒による掛け合いが全 5 ラウンドあり、合計 50 回の「掛け合い歌」が歌われた。

ブータンの学校でのこうした大会の特徴は、ブータン各地で行われていた生活文化

に根ざした日常的な掛け合いの状況が学校教育に持ち込まれ、例えば、周囲の人々が囃し立てて勝ち負けを判定していたプロセスが、評価の観点として整理され、点数がされているなどして、成立しているところにある。言い換えれば、大会そのものの開催が、学校そのものを伝統文化に抱き込んでしまっているわけで、この点が日本との大きな相違であった。

シンポジウムでは、「ブータンの宝石ツァンモ-文化を未来につなぐ-」をテーマに首都ティンブプーのホテル、プンツォ・ペルリの会議場で行われた。

ブータンの王立舞踊団主任研究員クンザン・ドルジからは、ブータンの文化全体を概観しつつ、ツァンモについて「牛飼いが暇な時にやっていたというだけではない。宝石のようにまだブータン人がその価値に気付いていない大切なものである」といったことが語られるとともに、日本側からの報告に多くを学んだことが伝えられた。

放送関係者のツェリン・デマからは、放送による歌の掛け合いの報告があった。そこでは、会ったこともない遠くの地の人同士が、ラジオを通して掛け合ったり、土地ごとの違いや相手のうまさを感じたりすることの重要性が語られた。

国語の普及に努める委員会であるゾンカ開発委員会の主任研究員であるペマ・ウォンディは、消滅の危機にあるブータンの諸言語についての懸念を強く訴えた。彼は「母語と思考の方法は密接に結びついており、私たちが母語で話すことは、考えたり、感じたり、信じたりすることに影響する」「言語が死ねば思考の方法も失われる」と説き、伝統的な歌の文化の重要性について主張した。その他、ブータン側からは、学校教育、教員養成の立場から、伝統的な歌や文化教育についての取り組みや考えが述べられた。

日本側からも報告があった。研究分担者の権藤は、これまでの調査をもとにしつつ、日本の音楽教育の歴史と関連させて考察し、ブータンの取り組みを日本の音楽教育へ生かす可能性について考察した。加藤は、アジアの民族音楽の観点から、ブータンの掛け合い歌を鳥瞰した。

こうした中で、ブータンの歌の伝統文化の重要性と価値が再認識されるとともに、日本の音楽教育への大きな示唆を得ることができた。またこうした協働によるつながりが「相互啓発」「開発研究」へと発展したことが確認された。

第 2 に、日本音楽教育学会、日本民俗音楽学会、東洋音楽学会等において、掛け合い歌のメカニズムと学校教育への応用について発表し、理論化と実践報告を行った。以下、ポイントをまとめる。[雑誌論文]

「掛け合い歌」の伝統と現代との関係性地域において伝承されてきたブータンの

「掛け合い歌」は、生活形態が変化し、歌われなくなる一方で、学校が催す大会により伝承が行われていた。地域での伝承との違いは、全体構成が定められていた点である。掛け合いでは、相手を嘲笑する悪い言葉の時に盛り上がりを見せるが、最後には仲良くなって終わるように配慮されていた。特徴的なのは、チェアマンの存在である。チェアマンにより、課題を出されたり、けしかけられたりすることにより、歌い手は臨機応変能力を問われることになる。チェアマンは、ある種の教育的指導者といえる。このような存在は地域のツァンモでもいたといわれる。このように「掛け合い歌」をとりまく文化・社会性の重要性について再考する必要がある。

学校教育における実践の基本的な枠組み  
小中学校の音楽授業における実践を通して、以下のような基本的な枠組みと成果が見えてきた。

- ・ 楽しい体験をくり返し、元歌を身体化する。
- ・ それを掛け合いの構造にし、歌詞をつくる。子どもの必然性や、無理なく作ることができるような段階的な手立てが重要となる。身体化されている言葉のリズムの活用も有効である。
- ・ 作られた歌詞を、二人やグループの掛け合いによって歌う。適度な競争意識が掛け合いを盛り上げる。発表したり、聴き会ったりすることも歌を楽しむ有効な手立てとなる。クラスの仲間（聴衆）を参加させ、歌の活動に抱き込むことにより掛け合いの面白みは一層増す。

「掛け合い歌」では、旋律や歌詞の固定化は問題にされず、自由度が高いため、子どもは歌を「自分の節」として相手に伝える。解放感の中で達成感を味わいながら、歌うことの意味を再認識していく。

音楽教育における「掛け合い歌」の可能性

「掛け合い歌」を教室に持ち込んだ時、子どもたちの姿を通して、掛け合う行為から生まれた実践的な価値が読み取れた。ブータンでの調査からは、その文化のなかで築かれた様式やルール、世界観等に基づく「掛け合い歌」の行動に、一つの文化における歴史的な継承からもたらされる価値が読み取れた。また、ブータンでは、教育における知識・技能の習得が倫理的な位置づけのもとに重視されている。

本研究では、単なる教材化にとどまらず、学校文化に掛け合う行為を位置づけ、教材観や教育内容、教科音楽と民俗音楽文化との関係、教育内容としての芸術文化と民俗文化の関係の捉え直し、あるいは音楽科の見方・考え方の問い直しを行い、今後求められる資質・能力の育成に結びつける可能性を探った。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計22件)

加藤富美子、伊野義博、黒田清子、榎藤敦子(2017)「未来に文化をつなぐための協働-ブータンの遊び歌ツァンモ研究の展開-」『東京音楽大学附属民族音楽研究所紀要』第6巻、査読無、(印刷中)

伊野義博、娜布其(2017)「チベット族掛け合い歌エレシクの構造-中国青海省剛察県の場合-」『新潟大学教育学部研究紀要』第9巻第2号、査読無、pp.325-357.

[http://dspace.lib.niigata-u.ac.jp/dspace/bitstream/10191/47102/1/9%282%29\\_325-357.pdf](http://dspace.lib.niigata-u.ac.jp/dspace/bitstream/10191/47102/1/9%282%29_325-357.pdf)

娜布其(2017)「チベット族の掛け合い歌エレシクの歌詞の内容と修辞法」『現代社会文化研究』第64号、新潟大学大学院現代社会文化研究科、査読無、pp.19-36.

[http://dspace.lib.niigata-u.ac.jp/dspace/bitstream/10191/47370/1/64\\_19-36.pdf](http://dspace.lib.niigata-u.ac.jp/dspace/bitstream/10191/47370/1/64_19-36.pdf)

伊野義博、加藤富美子、黒田清子、榎藤敦子、山本幸正、娜布其(2017)「『掛け合い歌』の教育学-未来に文化をつなぐ-」『音楽教育学』第46巻第2号、査読無、日本音楽教育学会、pp.97-98.

伊野義博、黒田清子、加藤富美子、榎藤敦子、山本幸正、ツェワン・タシ、ペマ・ウォンチュク(2017)「ブータンのあそび歌ツァンモ-学校教育における継承の取り組み その2」『新潟大学教育学部研究紀要』第9巻第2号、査読無、pp.301-324.

[http://dspace.lib.niigata-u.ac.jp/dspace/bitstream/10191/47101/1/9%282%29\\_301-324.pdf](http://dspace.lib.niigata-u.ac.jp/dspace/bitstream/10191/47101/1/9%282%29_301-324.pdf)

Atsuko Gondo, Yoshihiro Ino, Tomiko Kato, Kunzang Dorzi, Pema Wangdi, Tshewang Tashi, Thering Dema, Ngawang Namgyel. (2016) “A

Discussion on the Singing Dialigue Tsangmo: Bridging Cuture Between Bhutan and Japan, from Past to the Future” Bulletin of The Graduate School of Education. Hiroshima University Part.1 ( Learning and Curriculum Development ) Vol.65, pp.43-52. 査読無

Ino Yoshihiro (ed.), (2016) Bhutanese Treasure Tsangmo: Bridging Culture from the Past to the Future, Japan Society for Bhutanese Folk Music Studies. 査読無、20頁.

伊野義博、永井民子、中村奏絵、中村正之(2016)「音楽授業における掛け合い歌の実践的研究」『新潟大学教育学部研究紀要』第9巻第1号、査読無、pp.125-155.

[http://dspace.lib.niigata-u.ac.jp/dspace/bitstream/10191/44720/1/9%281%29\\_125-155.pdf](http://dspace.lib.niigata-u.ac.jp/dspace/bitstream/10191/44720/1/9%281%29_125-155.pdf)

榎藤敦子、明道春菜、伊野義博、加藤富美子、黒田清子、永井民子、山本幸正 (2016) 「歌唱における学習過程の再考(2) - ブータンの掛け合いをてがかりにした実践開発 - 」 『初等教育カリキュラム研究』第4号、査読無、広島大学大学院教育学研究科初等カリキュラム開発講座、pp.15-27.

[http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/3/39403/2016032911202950150/JEEC\\_4\\_15.pdf](http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/3/39403/2016032911202950150/JEEC_4_15.pdf)

黒田清子 (2016) 「ブータン文化におけるあそび歌『ツァンモ tsangmo』の位置づけ - ジグミ・ドゥツパ氏へのインタビューをてがかりに - 」 『金城学院大学論集 人文科学編』第12巻第2号、査読無、pp.112-120.

[https://kinjo.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=814&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=17](https://kinjo.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=814&item_no=1&page_id=13&block_id=17)

伊野義博、黒田清子、加藤富美子、榎藤敦子、山本幸正、ツェワン・タシ、ペマ・ウォンチュク (2016) 「ブータンの遊び歌ツァンモ - 学校教育における継承の取り組み - 」 『新潟大学教育学部研究紀要』第8巻第2号、査読無、pp.167-192. [http://dspace.lib.niigata-u.ac.jp/dspace/bitstream/10191/39633/1/8%282%29\\_167-192.pdf](http://dspace.lib.niigata-u.ac.jp/dspace/bitstream/10191/39633/1/8%282%29_167-192.pdf)

伊野義博、黒田清子、榎藤敦子、ペマ・ウォンチュク (2015) 「ブータンのあそび歌 ツァンモとカプシュー - トンサとタンガンにおける調査から - 」 『民俗音楽研究』第40号、査読有、日本民俗音楽学会、pp.1-12.

伊野義博、黒田清子、榎藤敦子、Pema Wangchuk (2015) 「ブータン歌謡カプシューの実際 - タシガン・メラ村の場合 - 」 『新潟大学教育学部研究紀要』第7巻第2号、査読無、pp.335-359. [http://dspace.lib.niigata-u.ac.jp/dspace/bitstream/10191/31975/1/7%282%29\\_335-359.pdf](http://dspace.lib.niigata-u.ac.jp/dspace/bitstream/10191/31975/1/7%282%29_335-359.pdf)

伊野義博、加藤富美子、黒田清子、榎藤敦子、永井民子、明道春奈、山本幸正、娜布其 (2015) 「『掛け合い歌』の教育学」 『音楽教育学』第45巻第2号、査読無、日本音楽教育学会、pp.74-78.

榎藤敦子、伊野義博、黒田清子、Pema Wangchuk (2015) 「歌唱における学習過程の再考 - ブータン歌謡ツァンモの調査をてがかりに - 」 『初等教育カリキュラム研究』第3号、査読無、広島大学大学院教育学研究科初等カリキュラム開発講座、pp.23-35.

[http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja/list/HU\\_journals/AA12611299/--/3/item/36858](http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja/list/HU_journals/AA12611299/--/3/item/36858)

伊野義博、加藤富美子、黒田清子、榎藤敦子、山本幸正、娜布其 (2014) 「『掛け合い歌』の教育学」 『音楽教育学』第44巻第2号、査読無、日本音楽教育学会、pp.90-94.

伊野義博、尾見敦子、黒田清子、榎藤敦子、山本幸正、Tshewang Tashi、Pema Wangchuk (2014) 「ブータン歌謡ツァンモの実際 - トンサ県ツァンカ村とタンシジ村の場合 - 」 『新潟大学教育学部研究紀要』第7巻第1号、査読無、pp.81-99. [http://dspace.lib.niigata-u.ac.jp/dspace/bitstream/10191/31117/1/7%281%29\\_81-99.pdf](http://dspace.lib.niigata-u.ac.jp/dspace/bitstream/10191/31117/1/7%281%29_81-99.pdf)

黒田清子 (2014) 「ブータン文化の諸相 - 掛け合い歌ツァンモ (tsangmo) の歌詞からの考察 - 」 『金城学院大学論集 人文科学編』第11巻第1号、査読無、pp.193-220.

[https://kinjo.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=676&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=17](https://kinjo.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=676&item_no=1&page_id=13&block_id=17)

伊野義博、黒田清子 (2014) 「ブータンのツァンモ、占いと掛け合いの諸相 - プナカにおける調査から - 」 『民俗音楽研究』第39号、査読有、日本民俗音楽学会、pp.37-48.

榎藤敦子 (2013) 「初等教育における音楽学習過程の検討 - ブータンの民俗音楽をてがかりに - 」 『広島大学大学院教育学研究科紀要』第1部、第62号、査読無、pp.65-72.

[http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja/list/HU\\_journals/AA11618554/--/62/item/35333](http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja/list/HU_journals/AA11618554/--/62/item/35333)

②1 黒田清子 (2012) 「ブータンの国民総幸福 (gross national happiness) と自文化観」 『金城学院大学論集 社会科学編』第8巻第2号、査読無、pp.19-37.

[https://kinjo.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=408&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=17](https://kinjo.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=408&item_no=1&page_id=13&block_id=17)

②2 伊野義博 (2012) 「ブータン歌謡ツァンモ - 掛け合いと占いの諸相 - 」 『民俗音楽研究』第37号、査読有、日本民俗音楽学会、pp.1-12.

[学会発表](計18件)

伊野義博、永井民子、中村正之「即興的に歌うことの教育実践」日本音楽教育学会、2017年2月11日、糸魚川地区公民館、新潟県、糸魚川市

伊野義博、加藤富美子、榎藤敦子「未来

に文化をつなぐための協働-ブータンの遊び歌ツァンモの展開-」東洋音楽学会、2016年12月17日、大正大学、東京都、豊島区  
伊野義博、加藤富美子、黒田清子、榎藤敦子、山本幸正「ブータンの学校におけるツァンモの取り組みと今後の展望-サムテガン・セントラル・スクールトケルキ・ハイヤー・セカンダリースクールの取り組みを中心に-」日本民俗音楽学会、2016年12月11日、国立音楽大学、東京都、立川市  
伊野義博、加藤富美子、黒田清子、榎藤敦子、山本幸正、娜布其「掛け合い歌の教育学Ⅲ-未来に文化をつなぐ-」日本音楽教育学会、2016年11月1日、横浜国立大学、神奈川県、横浜市

Gondo Atsuko, "Creative dialogue through songs: Tsangmo & Japanese music education" Japan Society for Bhutanese Folk Music Studies, 2016.9.25, Hotel Phunesho Pelri, Timphu, Bhutan  
Kato Tomiko, "Tsangmo from the standpoint of ethnomusicology in Asian perspective" Japan Society for Bhutanese Folk Music Studies, 2016.9.25, Hotel Phunesho Pelri, Timphu, Bhutan  
Ino Yoshihiro, Kuroda Kiyoko, "Tsangmo Playful singing dialogues of Bhutan" Japan Society for Bhutanese Folk Music Studies, 2016.9.24, Kelki Higher Secondary School, Timphu, Bhutan  
伊野義博、永井民子、中村奏絵、中村正之「音楽授業における掛け合い歌の実践的研究」日本音楽教育学会、2016年2月14日、信州大学、長野県、長野市  
娜布其「青海省チベット族の掛け合い歌について~剛察県の調査を通して~」日本民俗音楽学会、2015年11月22日、相模女子大学、神奈川県、相模原市  
伊野義博、加藤富美子、黒田清子、榎藤敦子、山本幸正、永井民子、明道春奈、娜布其「掛け合い歌の教育学」日本音楽教育学会、2015年11月4日、宮崎市シーガイアコンベンションセンター、宮崎県、宮崎市  
伊野義博「うたをつくる掛け合う視点から見た音楽教育実践とその意義」日本学校音楽教育実践学会、2015年8月14日、成城大学、大阪府、大阪市  
加藤富美子「民俗音楽と学校教育：よりよい実践のために」日本民俗音楽学会、2015年3月8日、相模女子大学、神奈川県、相模原市  
伊野義博、黒田清子「ブータンの遊び歌ツァンモとカプシュー~その占いと掛け合いの諸相~」ブータン研究会、2015年2月14日、早稲田大学、東京都、新宿区  
伊野義博、加藤富美子、黒田清子、榎藤敦子、山本幸正、娜布其「掛け合い歌の教育学」日本音楽教育学会、2014年10月26日、聖心女子大学、東京都、渋谷区

黒田清子「かけうたに関するレビュー」日本民俗音楽学会、2014年9月14日、横手市交流センター、秋田県、横手市  
榎藤敦子「音楽学習過程と替えうたの関連性」日本民俗音楽学会、2014年9月14日、横手市交流センター、秋田県、横手市  
山本幸正「現音音楽づくりワークショップ 2014Vol.2 日本のうたをとりもどそう！」日本現代音楽協会、2014年9月6日、国立音楽大学、東京都、立川市  
伊野義博「つくりうた・かけうたの諸相-うたをつくる~横手・ブータンの事例から~」日本民俗音楽学会、2014年8月17日、横手市交流センター、秋田県、横手市

#### 〔図書〕(計1件)

伊野義博(研究代表者)(2017)「平成26-28年度科学研究費補助金 基盤研究(B) 研究成果報告書(課題番号26301043) 掛け合い歌のメカニズムを応用した音楽学習の研究」私家版、375頁

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

伊野 義博 (INO Yoshihiro)  
新潟大学・人文社会・教育科学系・教授  
研究者番号：60242393

##### (2) 研究分担者

加藤 富美子 (KATO Tomiko)  
東京音楽大学・音楽学部・教授  
研究者番号：30185855

##### (3) 研究分担者

山本 幸正 (YAMAMOTO Yukimasa)  
国立音楽大学・音楽学部・教授  
研究者番号：60440301

##### (4) 研究分担者

榎藤 敦子 (GONDO Astuko)  
広島大学・教育学研究科(研究院)・教授  
研究者番号：70289247

##### (5) 研究分担者

黒田 清子 (KURODA Kiyoko)  
東京福祉大学・国際交流センター・講師  
研究者番号：00724056

##### (6) 研究協力者

娜布其 (Nabuqui)

##### (7) 研究協力者

ツェワン・タン (TSEWANG Tahi)  
パロ教育大学・講師

##### (8) 研究協力者

ペマ・ウォンチュク (PEMA Wangchuk)  
ガイド・通訳